

記録集

第11回

雪舟サミット

in Yamaguchi

新しい価値を創り出す個性的なまちづくり
〜歴史・文化を継承し、未来を創造する〜

SESSHU SUMMIT



基調講演

基 調 講 演

多摩美術大学教授

島 尾 新 氏

東京生まれ。東京大学文学部美術史学科卒業。同大学院美術史学専門課修士課程修了。東京国立文化財研究所勤務、東京文化財研究所美術部広領域研究室長を経て、現在は多摩美術大学教授。専門は室町時代の水墨画。ここ15年あまりは雪舟を中心に研究しながら水墨画の普及にも努めている。



(演 題)

「雪舟の活かし方」

島尾でございます。1時間ばかり、ちょっと雪舟のお話にお付き合いいただきますけれども。まあ、雪舟サミットでは、皆さん、雪舟にゆかりのあるところからいらした方ばかりですので、釈迦に説法になるかもしれません。

15年以上、雪舟と付き合っておりまして、まあ、あいつと付き合いと、どう楽しいかということをちょっとお話しして、それから、少々思うところを述べたいというふうに思います。雪舟サミットはもう11回ということで、前、私は岡山、芳井でサミットがありました時に参加させていただいて、その時にもお話をさせていただいたのですが、それ以来ということになります。

今回は、この山口国民文化祭ということで、今日いらしゃった方も多いようです。昨日はパレードがございました。すごい人でした。皇太子殿下がいらしゃいまして、ロイヤルボックスは撮れないので映っておりませんが、これがキャラクターらしいのです。

何と申しますか。若干、失礼ではございますが、私、多摩美大という美術大学にありまして、ちょっと、美大のデザイン感覚からするとですね、いまひとつ、どうかという気がしないでもないのですが、まあ、みこしもあり、踊りもあり、山車も出てということで、なかなか楽しかったですね。そしてザビエル。張りぼてですけども出てまいりまして。さすが山口、国際都市で、これはどちらの方なのでしょうね。スペインですか、はあ。

何しろ、私は美術館に行こうと思ったのですけれど、皇太子さまのおかげで入れなかったものですから、1時間ばかりパレードを見ていまして楽しかったです。ただ、あえて文句を言えば、何でザビエルがいるのに雪舟がないのだと。今度、国民文化祭をやる時って言ったって、きっと50年ぐらいあとになると思いますが、まあそれまで国民文化祭をやっているかどうか分かりませんが、その時には、ぜひ雪舟人形を出していただきたいと思います。まあ、そのぐらいにして。

「雪舟への旅」です。おかげさまで、今、入館料がただというせいもあるのですけれどね。昨日は、皇太子さまがお戻りになってから、午後だけで6,500人来ていただきました。これは大変ですね。そのままいくと20万人ぐらい入ることになってしまうのですが、そうはいかないと思います。それと怖いのは、これが有料になった時に。つまり、国民文化祭が終わったあとに、どのくらい増えるのだろう、どうなるのだろうというのがあります。突然、半分になると嫌だなあと考えているのですけれど。

これは初日の午前中ですけども、かなりの人に入らせていただきました。例の山水長巻というもの、16メートルあります。これがポスターでございます。今回、とてもおしゃれです。普通の古美術のポスターというと、だいたい作品の写真がぼんと入っているか、いいところを切り抜いてあるかぐらいなのですが、今回は、原研哉さんという、皆さんご承知のところだと、無印良品、

あれの広告デザインをやっている人です。今、売れっ子のデザイナーです。その方にお願いしたら、何かのって、四連作か、五連作か、つくってくださいました。黒いからよく見えないのですけれど、なかなかおしゃれなポスターができました。

だいたい私が展覧会の紹介をする時には、常に担当等々ご紹介することになっていまして。左側の端にるのが、荏開津（エガイツ）君という私の大学の後輩ですけれども、担当の学芸員。真ん中が松原館長でございます。右に居るのは、正木美術館という大阪のほうの学芸員をやっている方。

「雪舟研究会」というのを、ずっと10年ばかり研究でやっております、今回、そのメンバーがみんな協力したものですから。やっぱり私も、自分も写ろうと。もうちょっと、ばかみたいなのもあるのですけれど、恥ずかしいのでやめておきます。

ということで、雪舟を少しご紹介させていただきます。

一応、「雪舟の活かし方」という題名を付けましたのは、何となく、やはり、まちおこしなり何なりで、総社市の『雪舟新聞』、これも拝見しましたし、ほかに、こちらでも、山口で、「あなたの雪舟」、「あなたの雪舟」と言われても。まあ、いろいろな活動があると思います。その中から、私、今日は一つだけテーマを絞りました。また、あとでお話しますけれども、ちょっとお話をしたいと思います。

しかし、もう皆さんご承知とは思いますが、一応、雪舟ってどんな人かという、こんな人ですね。この頭にかぶっている、日本のお坊さんは、こんなのをかぶらないのですけれど、これは「うさぼう」といって、中国のお坊さんの格好なのです。

ご承知のように、雪舟は数えて48歳の時に中国に行きます。これが大変身の元となるわけで、中国に行ったことをすごく誇りにしていたのです。それで、この中国風の格好をしていると、71歳というのは、もう当時としては、平均余命、平均寿命をとっくに超えた高齢ですけれども、なかなかしっかりした顔をしている。目は割と優しそうですね。それで、まじめそう。

だいたい芸術家という、これはちょっとイメージが

違ってしまふわけですね。芸術家という、だいたい岡本太郎みたいに「芸術は爆発だ」と言って。何か、ちょっとこう。ゴッホでもそう、ピカソでも誰でもいいのですけれど、ちょっと誰の写真を持ってこようと思って。こんな、ひげを生やして。なんか普通の人に見えます。

若いころは、よく分からないのですけれど、きっとこんなんじゃないのかなというのが、これは、貴重な雪舟でありまして、湯田のホテルで買ったのですけれど。これ、最後のひとつとホテルの人が言っていました。それで、なぜかこの絵文が居るのです。

ネズミ君が居るのです。これは例の、皆さんご承知のお話ですね。すぐにご紹介しますけれども。昨日、美術館の方のイベントで、図書館のホールで対談した山下裕二さん。『雪舟応援団』というので赤瀬川原平さんなんかと話をやっている人ですけれど。彼が言っていたのですけれど、「雪舟さんと一休さんって、イメージがかぶるんですよ」って。子どもころになると、なんか似たような感じがするのですよ。でも、まあとにかく、何で雪舟だか分かるかという、ネズミが居るからと。こういうわけでございます。

それで、ごく簡単に伝記を、一応おさえておきます。死んだのは、一応1506年ということになっています。これは簡単ですね。今年、没後500年でやっているのですから。2006から引くのは簡単なのですが、実はこれ、あやしいかもしれないのです。1502年という説があります。時間がないので、この辺は省略します。生まれたのは1420年。

だいたい覚えていただきたいのは、48歳で中国へ渡ります。これが日本全国を戦争に巻き込んだといいますが、東軍、西軍に分かれて京都を大混乱した応仁の乱です。ですから、これは言ってみれば、日本の歴史の変わり目の年に、たまたま中国に行っちゃった。ここまでは、どうもあまりうまくないのです。絵も。今日は時間がないのでご説明しませんが。

そのあと、帰国後、基本的には山口を拠点に活動します。そして、いろいろなことがあって、それで山水長巻。今お見せしますけれども、これを描いたのが67歳。それで亡くなったのが83歳か、84歳か、分からない。もしか

したら85歳かもしれません。何の証拠もありません、ということなのです。ですから単純に言って、人生で覚えておいていただきたいのは、この年号だけです。20年に生まれて、48歳で行って、67歳で山水長巻を描いて、80、分らないけれど、そのくらいで死にましたと、こういうことですね。

ここが人生の転機だったというのですから、これはむちゃくちゃ遅いのですが、48歳。私は、ちょうどその前の雪舟サミットに伺った時に、確か、よく分からないのですけれど45歳くらいだったのではないかと思います。それで、雪舟が48歳で人生も変えたのだから、おれも変えてやろうと思って、3年ほど待っていたのですけれど、やっぱり実際に48歳になったら、もういまさら留学するとか、何か変えようとか、そんな元気は全然ありません。今、53歳なのですが、もう、くたびれちゃっています。この時代ですからね。これはすごく大したことというか、ある種、変わった個性なのです。このあたりのことも、今日、お話します。

そして、20年くらいたった時には、もう、山口で老大家になっています。そして、かの山水長巻を描いて、そのあと、まだ20年近く生きて亡くなっている。それで、亡くなったところが、これはいろいろ（説が）ありますね。山口といい、益田といい、重玄寺といい。今日は、山口対益田のけんかに加わる気はありませんので。

とりあえず、一つだけいきましょう。これは山水長巻。今、出ています。今日は、もう前、長蛇の列ですからね。もちろん、これは本物ではありません。本物でこんなことをやったら、私は社会的地位を失います。いや、なかなかいいものなのですけれどね。

これは本物です。NHKの撮影の時のスライドですが、ともかく長い。それで、これも細かくやっていただけませんので、今日は、ともかく長くて、要するに、雪舟のすべてが詰まっています。

ここ、この岩、見てください。こんな岩、ジグザグ。こんなのないですよ、実際に。しかも、上も、この岩の上からですよ、木がじかに生えているという。ただ、これがなかなかスライドでは分からないのですけれど、なかなかアート(art)なのです、これの左上。このパワー

が、やはり雪舟なのです。この下の、岩のところ、ベタッと塗っている。

ただ、この山水長巻というのは、大内政弘という、時の主君に献上するものですから、雪舟君は、やっぱりリキが入っている。それで、いろんな物を詰め込んでいるのです。67歳ですからね。もう、当時としては、あとのくらい生きられるかわからないと思ったと思うのですよ。こんなカラフルな、かわいい、きれいなところがあります。

ただ、雪舟というのは、ふらっけな人ですから、こんなところもあるんですよ。これは、ちょうど真ん中あたりですけれど、これを見てください。ぬめえっとした山。普通は近くに、こんなの描かないですよ。これは、遠くの山の描き方なのです。それを近くに描いてしまっている。これは、もうちょっと真ん中へんきて、くたびれたのではないかと思います。あ、そろそろバテたなあ」って言って、こんなになっちゃったのかと。こういう、いいかげんなところもある人です。

ですから一つお願いしておきたいのは、雪舟の絵を見る時に、あまり硬く考えないでください。気楽に見ると、案外いいのではないかと思います。「国宝とかがついているから、きっと立派なものに違いないわ」と思っていたく必要はありません。

この人、実は、あまりうまい人でもないし、丁寧な人でもありません。むしろ、何と言いますか、破天荒なところ。そっちが面白いのです。最後にちょっとお見せしますけれどね。その面白さを見ていただけるといいなと思います。

ついでにこれ、あまりご覧になることがないと思って。これは毛利博物館の蔵の前です。山水長巻を撮影しているところでございます。ちょっと自己紹介と言いますか。こうやって、巻きながら撮っているのですけれど。撮っているカメラです。

このところ、光琳の紅白梅図屏風とか、ついこの間は、NHKで伴大納言絵巻、出光美術館とか、高松塚で白虎が消えちゃったやつとか、あの辺の番組をご覧になった方はいらっしゃいますか。あれを撮っているカメラが、これなのです。デジタルで2,200万画素。普通の数

え方で言うと、8,800万画素です。ですから、こう、パソコンで写っちゃうのですね、これは。変な写真です。

これでどこか分かる人がいると、えらいですね。これは、山水長巻の頭なのです。こっちが表紙、これが始まりです。これを撮って行って、デジタルですから最後にコンピューターでつなげる。つなげなければいけないのですね。これは、ここからここまで30センチなのです。それを、さっきのように台の上に置いておいて、ずらしながら撮っていくのですね。そうすると、進むのが15センチ。16メートルを15センチずつずらしながら撮っていくというのは、これはなかなか大変でございまして。

それをつなぎ合わせたものが、これです。これは申し上げても仕方がないのですが、山水長巻が11日に、今度は山口の美術館から毛利の方へ移ります。移ったあとに、これで作った原寸大ぐらいですね、幅40センチの物がそのまま、どこかにパネルで展示されるはずですが、これはちょっと見たら、きっと本物とそんなに区別がつかないと思います。ただ、これを、15センチずつつきながら撮るのは大変なのです。百何カット撮らなければいけないわけですから。

私もこの時、それをやっていて、東京へ戻って、いつも通っている整体のお医者さんのところへ行ったら、「島尾さん、腰骨が2センチずれている」と言われて。美術史家というのは、単に絵を見て遊んでいるわけではないということを申し上げたかったのです。

さて、それで一つ、私が常に申し上げているのは、雪舟の知名度というのは、すごく高い。「雪舟は誰ですか」というと、知らない人はいない。ここはサミットだからあれですが、フルネームを知っている人というのは、一般に聞くと、あまりいないですね。これは、雪舟等楊というのです。

さらにこの雪舟というのは、実は山口に来て45歳ぐらいから名乗った名前です。その前は、「拙宗等楊」と、字が違うのですね。こんなのを知っている人というのは、まず、あまりいません。それで、山口に来て、こう直すわけですよ。これ(拙宗)は使わない。中国で、「大巧は拙なるが如し」と言って、本当にうまいものというのは下手みたいに見えるのだという言い方があるのです

ね。

雪舟が、お師匠さんのお師匠さん、自分の元、先祖だと言っていた如拙というのがあります。如拙というのは如しです。これ、書くのは難しいのですよ。学生に笑われるのですが。如拙というのです。その人を宗(むね)とするという意味なのだろうと思うのですけれども、つまり、われわれが知る「雪舟」、この「ゆきふね」というのは45歳からですから、人生の半分、もうないわけないですね。

それで、拙宗から雪舟になります。これのおかげで、美しき画聖・雪舟になれたのですね。これ、画聖・拙宗って、こっちの字だと格好悪いですよ。何か、いかにも下手そうです。

そして、その次に有名なのは何かというと、例のネズミの話なのですね、さっきの。でも、これも、ここはサミットですから、あれが総社の宝福寺でのお話で、あのへんで雪舟は生まれたというのご存じだろうと思います。でもこれを一般の人に聞くと、このへんのことはあまり知らないのです。

つまり、雪舟というのは名前先行なのです。名前先行で、中身の話、絵の話、ここを知らない方が多い。これが問題なのですね。一応、復習しておきますと、これは宝福寺です。地元の画家の方がお描きになった雪舟。足の指で、ネズミを描くというものです。足の親指で描いたのですよね。柱に縛られて、涙をぼとぼと落として、その涙を墨代わりにして、足の親指でネズミを描いたというお話なのです。とにかく、だいたい普通の人に聞くと、知っている話というのはこれですね。

実は2002年、つまり4年前にも東京の国立博物館、それから京都の国立博物館で、雪舟の大きな展覧会をやりました。受付の人に聞いたら、その時も1日に10人ぐらいは、「すみません、雪舟のネズミの絵、どこにあるんでしょうか」と聞きに来る人がいたそうです。これは話をよく知らない。何だって、涙で描いているのですからね。

そして、これ。宝福寺の法帖(ほうじょう)です。指を指しているのは何かというと、お墓ですね。これが、雪舟がくくり付けられた柱です。そんなわけはないので

す。建物が新しいのですから。

ご住職に伺ったら、要するに見学に来る人が、「どれが雪舟の柱ですか」って聞くんですって。最初のころは、「これは当時の建物ではなくて、もう新しくなったものですから、柱はありません」といちいち答えていたらしいのですが、途中でだんだん面倒くさくなって、もう、これに決めたと。聞かれたら、これだということにしてしまうということだったそうです。これは、みんな何で知っているかということ、これなのです。

これは、戦前の国語の検定教科書です。この会場には、これを使われた方も、結構おられますかね。ここに書いてあるのです。雪舟が幼いころ、お寺に預けられた。お寺のおつとめを怠って、絵ばかり描いていた。ある日のことである。和尚さんは、懲らしめのために雪舟をお寺の柱に縛り付けた。そして、涙をぼろぼろ、ぼろぼろ流してネズミを描きました。和尚さんが来てみると、そのネズミが雪舟の足にかみつこうとした。おお、危ないと言って、よく見たら絵だったという話ですね。もちろん、ここには岡山の宝福寺なんていうのは一つも出てきませんから、どこだか分からないのですけれど。

これは総社でございます。これは総社駅前です。総社駅前には、こういうふうに「雪舟の里」というのがあります。これもネズミなのです。総社の方は、当然ご存じだと思いますけれど、だから、これを見ただけで、もう雪舟だと分かってしまいます。ついでに、喫茶・雪舟があるのですが。

結局、今みたいなもので、何で面白がれるかということ、これは、雪舟という名前を知っていて、お話、つまり物語。お話を知っているからですね。お話を知らなかったら、何でネズミが雪舟なのよということになってしまうし、そもそも、雪舟を知らなかったら、「え、それ誰よ」という話になってしまうわけですね。もともとお話を知っていて、「ああ、この柱」とか、「ああ、このネズミ」となるから面白いのですよ。

私は、パワーポイントというのは、まだ初心者でございます。最初のことって、こういうことをしたいものなのです。何か、いろいろと。

それで、私が今日申し上げたいのは、要するに、すべ

て物語であるということなのです。つまり、お話があると、すべてのものは面白くなる。お話がないと、つまらない。その話はちょっとあとにしまして、もう一つは、今の話、「じゃあ、お話をどうして知っているのよ」というと、これは何と言っても教科書ですからね。教科書は力があるわけですよ。ですから、雪舟も教科書に、もうちょっと詳しく載せてほしいなと思います。

あと、今、威力があるのは、これですね。これは、今、県の方にお借りしてきたのですが、『西の京墨流し』という、雪舟と大内を描いている漫画です。描いているのは、河村恵利さんという方です。これは今、漫画で見る、そして、はやる。例えば『テニスの王子様』というのがはやった途端に、みんなテニスをやったり、この漫画がはやった途端に、みんな興味を持ったり。ともかく、こういうメディアでいろいろなことを、できれば取り上げてほしいと思っています。

山口の県立美術館では、「見る・聞く・調べる」というものです。中学校くらいを対象にした副読本みたいなものですね。今、総合的な学習とかいろいろありますから、そういうところで使われる、使えるものだと思います。会員の出張授業ということで、学芸員が出て行って、小学生とかに出張授業というのをやっています。

これは、おとといです。山水長巻の前です。小学校3年生でした。一生懸命、見ていってくれるのです。こういうのは、うれしいですね、やっぱりね、本当に。それで、あんまりうれしいので写真を撮ったのですけれど。この日は、あと、別に、女の子の4人連れというのも来ていました。

これが2,000人くらい来るようになると、雪舟が見たいということになるのですけれど。こういう「ですます調」で、中学生向けに易しく書いた本。半分は、先生に使っていただくということでつくったものです。こういうのをやっています。

ここは、自分の本の宣伝なので飛ばします。でも、ミュージアムショップで売っていますから、ご興味があったら買ってみてください。帯がジュディ・オングさんです。正直に言うと、小学館の人に「もうちょっと若い人は、いないんですか」と聞いたのですけれど。

もう一つお話ししておきたいのは、こういう、今の雪舟のネズミみたいなもの、ああいうのは荒唐無稽(むけい)なつくり話だと思われるかもしれませんが。当然、うそだろうと。だけど、これは江戸の初めには知られていたのですね。江戸時代の初めですから17世紀。今や、400年前ですね。

私は、基本的に火のないところに煙は立たない論というものを信仰しております、何かないと完全なでっち上げた話というのは、なかなかないものなのです。さらからつくっちゃうというのは、難しいのです。歴史を捏造(ねつぞう)するというのは、ですから、何かあるはずなのです。

今の話もだいたい、そんなのうそでしょうと言われていたのですが、きっと宝福寺に何かのお話が残っていたのだと思うのですよね。宝福寺にいたのは子どもの時ですから、こんなガキが、のちのち有名な絵描きになるか何になるか、分からないわけです。誰も。だから結局、あとで、「あのころにいた、あのガキがさあ、あの雪舟らしいぜ」という話になるわけですよ。「そういえば、あいつ、絵がうまかったよ」ネズミを描いていたかどうか知りませんよ。まあネコだったかもしれないし、イヌだったかもしれませんが、何かそういう話になるのです。それがあつ程度、尾ひれが付いて、ああいう話になる。

ですから、よくこれは証拠がないからと言ってみんな否定してしまうのですけれど、いわゆる雪舟資源と書いたのですけれど、まあ、文化資源としての雪舟という話になるのですね。これは、結構まだ残っているのです。

いろいろなところに雪舟庭というのがありますよね。一番有名なのは、もちろんこちらの常栄寺さん、それから、益田の萬福寺さん、医光寺さん。それから九州、川崎の魚楽園。広島にもあります。英彦山の中にもあります。こういうものも、実は半信半疑というところがあるわけです。学問的には論証のしようがありません、資料がありませんから。でも、火のないところに煙は立たないのですよ。

例えば、九州の英彦山の例で見ます。あれはきっと、雪舟が実は中国から帰っていて、一時期、大分に行くの

ですけれど、その大分に行く途中に、あそこを通ったのだと思うのですよね。その通ったルートに、お庭の霊場があるのだと思っているのです。これは何か関係があるはずですよ。そういうところを積極的に見ていけば、雪舟資源はもう少し増えていくし、さっきみたいな物語、お話もできていくということになると思います。

これは常栄寺さんですね。

すみません、さっき私は(パワーポイントが)初心者だと言いましたけれど、雪舟作品との関連に参加されている市町村すべてに行つて、すべてのところでスライドを撮りまくっているのですが、まだデジタル化が全部終わっておりませんので。ここまで来て、さっき名前を出しておきながら魚楽園がないのですが。そういうわけで、すべてがそろっていないことをお許しください。

私が今日、強調したいのは、お話なのです。ネズミのお話でもいいのですけれど、もうちょっと絵を描いたお話とか、絵のお話が知られているといいのですが。つまらない風景でも、ふるさとだったら単なる田んぼの写真でも愛着が沸くではありませんか。

私は、生まれは葛飾の柴又という、瘋癩(ふうてん)の寅さん家の隣なのですけれどね。隣というか、隣の家なのですけれど。子どものころに、練馬に移りました。そのころ、周りは、丘の陸島ですね。ついでに、何と言っても練馬太鼓だったのです。石神井川という川が流れていました。そこで、おばちゃんたちが大根を洗っていたのです。そんなの、今、写真を撮っても何にもないですよ。それは、とてもなつかしい、愛着のある風景でした。それは、今、練馬に行つたつて、ちゃんと思い浮



かぶことは思い浮かびます。変わっちゃっていますけれど。

大げさに言うと、これは歴史的創意によると。格好いいでしょう、言葉として。雪舟に対しても、こいつを働かせると、いろいろなお話が思い浮かぶのです。そして、いろいろと楽しくやれる。今は、これがなくなっちゃっているのです。

だって、全国展開のコンビニやスーパーでは、そういう物語にならないのですね。「うちのダイエーはさ」、「おれの子どもころのダイエーはよお」「練馬のダイエーはさあ」と言っても、どこに行っても同じですからね。ダイエーですと面白くないのですけれども、JUSCO（ジャスコ）でもいいのですけれど、描き出される物語が全国、同じになってしまう。

こういうお話というもの、これがやっぱり、私がまちおこし等々についても、そしてさらには、最終的に経済効果につなげる上でも重要だと思っているわけです。そういう土地の物語、あるいは雪舟についての物語、文化についての物語。そういうものが、今、どんどんどんどん薄っぺらになってきている。これが、まずいのだと思います。

これは日本三景です。こういう名勝、これは物語の塊みたいなものですね。平清盛がつくった、すごい斜面とか。これは赤浜です。つまらない風景です。でもね、これでも楽しいわけですよ、私なんか。だって、これは雪舟が生まれたところですから。

碑が建っています。これは今、地元のタクシーの運転手さんに聞いても、なかなか知りません。でもね、ここにだって物語があるのです。これは、実は、私が二十何年前に行った時、学生の時、三十年前かな。その時は、田んぼの中であって、きれいなところだったのです。ところが、その横っちょに、何と言いますか、俗に言うラブホテルというやつが建ちまして、一時期は、こういう写真が撮れなかったのです。この辺に入っちゃって。

ところが幸いなことに、そのラブホが倒産して下さりまして、幸いと言ってはいけなんでしょうけれど。それで今、ここは再開発地域になって、こんなふうになっています。それでさら地になっているのですが、お話

を伺ったら予算が取れないということで。今は、どうなっているでしょう。これは3~4年前ですから。

すぐそばに、雪舟の生誕の碑というのが、もう一つ建っていました。これは500メートルくらいしか離れていないのですね。どうもこれは昭和の初めに、赤浜と田中というところが、うちが本家だというので取り合ったらしいのです。それで結果的に二つできてしまったと。

ですから、雪舟ファンになると、あんなものでも楽しみちゃうわけですね。だから、何でもかんでも立派な建物が建っていればいいのかとといったって、そんなところは、そういくつもないわけで、そうではなくても楽しめる、お話付きの土地、物語のある土地というものを、そして、それを来た人々に語りかけられるようになるといいのだからなあと思います。

これは雲谷庵です。しかも雲谷庵というのは、実は、瑠璃光寺の塔を見るのにとってもいいところだと知っていましたか。これ、きれいでしょ。これは、すぐそこに瑠璃光寺があります。これは雪舟ですね。

そして、物語の欠如というのは何につながっていくかということ、要するに風景から人がいなくなっていくのです。今、旅というところへ行くかということ、例えば天橋立でもいいです。あるいは、お寺巡り。「おお、すごい光景だ」と。これは視角ですね。その次に何をするかということ、「うまいものが食いたい」と。視角と食欲なのです。ですから、風景というと完全に人がいなくて、自然だけになってしまう。

これは、戦前の天橋立の絵はがきでございます。ここで、きれいな若い女性が。きれいかどうかは、ちょっと顔が見えないと分かりませんが、これは、普通は股（また）の間から、こうやってひっくり返って天橋立を見るわけですが、それは着物姿ではお下品でできません。これは、まだ取りあえず人が添えられているのですが、今、普通の絵はがきって、これですよ。つまり、人がいないのですね、どこにも。わざわざ人をどけて撮っている。

一番きれいなのは、こんな感じ。これは東福寺の中、雪舟寺と言われているお寺の庭なのですけれどね。雑誌なんか見ても、みんなこれでしょう。ただ、実際にはね、

これ。これは、西本願寺なのです。すみません、全然、雪舟と関係ないのですけれど。精舎の建物ですけれど、こうやって人がゴチャゴチャいるわけですよ。これを消しちゃったのが、つまり、私流に言えば物語を消しちゃったものが、この上なのです。これが、いけないんじゃないかと私は思っています。

さて、そうしてみると、雪舟と付き合うと、これは行くところがいくらでもありますよね。今まで、雪舟サミットとかでいろいろなところをお回りになっていると思いますけれど、日本中だってこれだけなのです。山口はここですから。それで、こうやっちゃうと「え？十力所くらい」という話になるのですが、昔は新幹線も飛行機もないですからね。

雪舟君は、この間を船で行ったり、歩いて行ったり、輿（こし）に乗ったりということで行くわけです。どこかまで行こうと思うところへ全部行っているわけですよ。まあ、瀬戸内海が常ですけれどね。これは途中が省略ですから、途中で寄ったところはいくらでもあるということです。私は20年やっていますけれど、とてもじゃないけれど、まだ行ききれません。

これは日本。これは中国。中国へ行くのはどうやって行くかということ、山口から博多を通して、五島列島へ行って、そこから中国へ行きます。寧波という所へ行って、そこから、この大運河というところを、ずっとつなぐのです。それで北京まで、こういうふうに行きます。日本の幕府、足利幕府が中国へ出した、遣明使という使節にくっついて行くわけです。

そうすると、これだけで関係する土地の数は、すごいことになります。もうちょっと詳しい地図を出すと、これ、全部行かなければいけないのです。大変。数えられないでしょう、小さくて。これは、いくらでもあるということです。ちょっとあげれば、これくらい。さらに、それぞれのお寺でも、いろいろありますからね。

そして、やはりタブーを楽しむというのは土地に詳しくないと面白くないので、その入り口がついてくれるといいですよ。これは天橋立です。実は、写生、写生と言われるのですが、こんなふうに天橋立が見えるところはありません。

私もおとし、NHKのヘリコプターに乗せてもらって飛んでみたのですが、上空、だいたい900メートルくらいにならないと、このへんの向こうの海は見えてこないのです。ちょっと今日は、スライドを持ってきませんでしたけれど。ですから、これは仮想の視点、つまり雪舟は、その時代はヘリコプターもありませんので、仮想の視点から描いた作品です。これは、地べたです。歩き回って、せっせとスケッチして、それとくみ分けて上から見ているのでしょう。雪舟は飛べませんからね。

これは智恩寺という有名なお寺です。実は、これは博物館に出ている、本物ではなくて、模本から撮ったものですけれど、すごく細かく描いています。ここに、変な人間みたいなのが2人いるでしょう。これは実は、お地藏さんの像なのです。そして、その左側のほうの海岸線。このへんを、こう行って、こうへっこんで、こう出て、こうなっているというのは、本当にぴったりなのです。全然関係ないところまで細かく描いているのです。

ここに橋立があります。ここにあるのが、籠神社という地元が一番大きな神社なのですけれど、こういうところは別でしょう。ここに変な形のものがあります。これは土橋といって、戦争の時に、敵がいっぱい、いっぺんに来てしまうのは嫌だから、細くしてしまう。ひと一人だけ、どうにか通れるくらいに細く削ってしまったのです。足を踏み外すと落ちこちてしまいます。そこを、敵がこう、一人ずつやってくるのを、こうやってやっつけるといふ説なのですが、これは、どうもそれらしいのです。ちょっと格好が変なのですけれど。それで、実際に今、行ってみると、こんなのがあるのです。その向こうは、ちょっと平らになっていて、ここにおうちがあるのです。雪舟というのは、こういうのを非常に細かく描いています。それが、この天橋立です。

要するに、今みたいなことを確かめようと思うと、これは大変でございまして、私はいったい何回行ったのだろう、ここに。分かっているだけで、もう10回以上行っているのです。そして、道なき道を踏み分けて、山の上へ登りですね。そんなことをしていると、これはもうマニアックですけれどね、本当にね。これは実は「本坂道」という坂道なのですけれど、ここにあるのですよ。

そうすると、本当に雪舟は、ここにいったい何日いたのかわかりませんが延々と歩き回っている。そしてスケッチしたということが分かります。その雪舟の、言ってみれば息遣いみたいなものが細かく分かってくる。

そして、その途中を知らないとはつまらないですよ。お寺があって、知恩寺があっても、これ何、知恩寺って何、知恩寺って、ということになります。これは文殊菩薩の有名な霊場なのですが。だから、どうしたってそういうやつを知らない面白くない。逆に知っていると、どんどんどんどんはまってきて面白くなるのです。要するに、それぞれのところで、何と言いますか、中心になる方々にマニアになっていただくというのが一番です。そうすると、いろいろなお話ができるようになります。

ちょっと一つだけ。普通は写生とか、あと、お寺とか神社。ここまで、こんな道とか何とか、土橋とかを正確に描いているかということ、これ自体は、ちょっと、天橋立にいた大名なんかにあげたものなのですから、もう一枚、何と言うんですかね。群集のほうがあるのではないかというのがあります。新説になるか珍説になるかわかりませんが。そして、このスケッチ風の、チッチッチというものです。よく写しています。江戸時代のものなのでしょうけれども。いかに、辺地を見てスケッチしたという感じのものでございます。

ということで、雪舟は、ともかく行っているところが、あまりに多い。ほかの絵描きだと、こうはいきません。京都にずっといたら、雪舟との旅だつてできないのです。京都だけでおしまいですよ。

雪舟君が、あれだけいろいろなところへ行ってくれているおかげで、観光プランがたてやすいのです。これは山口県立美術館の会場の出口ですけど、ここでもやっぱり、こういうのがあります。雪舟の旅。無錫、蘇州、広州、上海と、これは中国ですね。29,800円。これは安いですね。何たってモニター募集ですからね。これはお得ですよ、本当に。

今、オプションで行くと高いんですよ、中国は結構。われわれは変なところに行くでしょう、お寺とか。それでルートがむちゃくちゃじゃないですか。そうすると、

結構10日間で30万円くらいかかっているのです。

先ほど地図でお見せしたような、こんなものは、無限にできます。そして今は中国もなかなか発展してきて、これよりもおいしいです。そして、さっきみたいに楽しめば、つまりどういうことか。これが、その、寧波というところへ上がっていく海です。何にもない。何にもないけれど、「ああ、これが、あの遣明使の通った道か」と思えば感動できるのです。

これが若き私ですけども、実は、ここは寧波のまちで、雪舟が昔々、きっと上陸したというところなのです。そして、「ああ、雪舟があちから来たのね」と指さしているのですが、こんなことだけで感激してしまう。

これは雪舟が中国に行って、景德山、景德寺というところで、四明天童第一座、首座という称号をもらいます。雪舟は、実は日本ではあまり出世していないものですが、中国へ行ってもらったのが、すごくうれしいのです。あとで出てきますけれども、中国でもらったその称号を、一生懸命、自分の絵に書くのです。四明天童第一座と。これは、お寺で、住持さんの次くらいです。これをもらうわけです。

ただ、これは儀礼的なものです。今でもほら、例えば日本の小泉首相がアメリカが何かに行ったら、どこかの名誉市民とかもらうではないですか。あれと似たようなものだから、中国で修業したというのほうで、あまり意味はないのですけれども。それもうれしかった。その天童寺への道なのです。そこをうれしそうに歩いているのが、これは別に中国のお坊さんではなくて、私と一緒にいった慶応大学の先生ですが、うれしそうでしょう。ああやって、うれしそうにできるわけです、雪舟ファンになると。そして、これが四明天童第一座という写真です。

さっき出てきた女性、高橋さんです。

これが天童寺なのです。ここで、墨書をしました。四明天童第一座と書いてもらって、写真に撮ったものです。

これも、雪舟が絵を描いたものです。これを描いたのです。うわあ、長えて。すみません、スライドをデジタルにしていないのですけれども。

ですから、そういうふうな物語を見つけていくという

のが、やはり大事なのだということです。これが天童寺です。さっきの。普通だと、こういうふうになります。これだと「うわあ、すげえな」って。これは、雪舟が描いたものでしょう。これは今、美術館にあります。

これは、大運河とって、さっき、船でどんどん北京へ行くのだと言いましたね。蘇州というまちがあります。例の蘇州焼きは、年配の方はご存じと思います。あの蘇州です。あの蘇州のそばにあるのですが。五十幾つ、穴が開いているのです。こういうのは目立つでしょう。

でも、これだって、やっぱり雪舟が、ほら、書いてるじゃん。これを一つ知っていると、断然楽しい。ついでに言うと、これ。延慶。寧波の中にある、単なる倉庫なのです。これ、延慶とって、延慶の慶が抜けて、お慶び申し上げます。「慶」ですね。延慶寺というお寺があったところ。こんなものを見てうれしくなってしまう。ここに昔、雪舟がいたことがあったのか、というふうにお話を膨らませていきます。

これは金山ですね。これは揚子江の中にあります。雪舟が行った時に描いたものです。今、こうはなっていないでしょうけれど、建物があります。ぜひ、いらしてみてください。楽しい中国の旅ができます。

ちょっと絵の話をいたしますと、中国の北京。当時の北京には、いろいろな国から人が来ていますから、雪舟がその人たちを見た。見て描いている。南蛮人。これは高麗人、朝鮮人ですね。これはインド、これが朝鮮。そして、動物です。ゾウ。これがゾウらしいですね。これはラクダ。ラクダなんですけれどね、ふたこぶラクダ。

だけどこの顔、いいとこウマかロバでしょう。雪舟はうそをつくのですね。どうも、ごまかしたらしい。全部、本物を見たかどうかは、分からないのですよ。絵から描いたかもしれないのですけれどね。「背中に2つこぶがあってさあ、何か変なやつなんだよ」とか言って、つくっちゃって。これは雪舟の捏造(ねつぞう)でございます。これで信じてもらえたかどうかは知らないのですけれどね。

さて、それでもう一つ、やはり美術の話のほうで、最後10分くらいしかなくなってしまうかもしれませんが、一応、絵をご紹介したいと思います。雪舟の絵、国宝が6点あ

ります。一応、全部きます。ただし、いつもあるわけではありません。半分くらい展示されて、変わってしまいますから。先ほど、山水長巻はお見せしました。さて、これを全部言えますかということ、ここは雪舟サミットですから、皆さん、当然ご承知でしょうね。あえてアンケートはとりませんけれども。だいたい、これは言えない人がほとんどです。

これは山水長巻。しかも、だいたい全部、晩年。秋冬山水図。それから破墨山水図という、雪舟自身がデッサンをしている。それから、山水図、個人蔵。これは個人とはいっても国宝なので。倉敷の大原さん、大原美術館の大原さんのところにあります。そして、ついこの間、国宝になりたての慧可断臂図というものがございます。ついこの間の2002年の雪舟展の時には、これがなかったのです。ですから、今回、山口でやっているのは、世界初の雪舟国宝6点が全部出る展覧会になるわけです。

これが慧可断臂図。これは破墨山水図ですね。そして、これが有名な秋冬山水図。

これだけちょっとご説明しておくと、これ、よく言われるのは、ずうっと出ちゃうので。これは何かというと、「木の枝じゃねえか」という人が多いのですが、これは実は、岩なのです、でっかい。だけど、岩の上が消えちゃうでしょう。それで消えちゃって、こうなっていると、かすみになんですよ。かすみなんだけど、こっちはこっちで、これ、お山があつて、空でしょう。すごく不思議なのです。

そして、これは変な絵です。雪舟は変な絵が多いです。ここにもあります。黒い墨が、ベタッと塗ってあります。これは何だか分かりません。意味が分からないのです。きっとこれは、最後に描いたものですね。何でこれを最後に描いたかということ、ここのところ、ほら、墨。黒がないと、何か締まらないじゃないですか。ちょっとこの辺、重みが欲しいなと思って、べちょべちょと塗ってしまうのです。これが雪舟なのです。

実際これを「おお、素晴らしい冬景色だなあ」と思える人は、まずいないと思うのです。こんな風景ありません。だって、ここからすごい、何て言うのかな。風景を思い浮かべよう、思い浮かべようといったって無理なの

ですね。こんなの、山じゃねえ、岩じゃねえ。だけど、これはぼこっと出っ張っている。こっちも、こう、ゴツゴツ出ているじゃないですか。この凸凹（でこぼこ）を消しちゃうと、これはまたあっさりした、つまらない絵になってしまうのですよ。

だから、ちょっと難しいのですけれど、要するに、これ、半分抽象画みたいなもので、岩であることを忘れてしまうと墨の線ですね。墨の線が、ポコンとここに出ているわけです。グツと。この力というのは、これが雪舟なのですけれど、こっちもグツと出ているわけです。そうすると、こっちがグツと出て、グツと出ているやつが、何かぶつかっているのですね。そして、こここのところには、ポトツという墨の重みがあるわけです。そして、こっちはこっちで、木がグウツと行き、ここでまた、グウツと行き、ここでグウツと行ったものを、これが受けて、すうっと上に抜いていくと、こういう動きになるのです。

これはもう、山水画であることを忘れてしまって、墨の線と面だと思って、それだけ追っかけて見ると、むしろ分かりやすいのですね。雪舟のすごいところというのは、そういう、いわゆる風景。先ほどもみたいに天橋立、すごい正確に描いたやつがあるかと思えば、こんな、ほとんど抽象画に近い、ある意味、半分抽象、抽象と具象が張り付いたような絵。これはもう、グウンときて、もう、これだけでいいというような。

それと、風景画でありながら、そういうファクター。ここ、浮いているよね、ここは、ごきごきしているなというリズムとパワーですね。その、何ていうか、ダイナミックな筆の線と形の動きと言えいいのでしょうか、



一種の力学ですね。そういうものが見えてくる。それがすごいと思います。

ですから、極端に言うと分かりやすくありません。こういうのは分かりやすいのです。達磨さん。これ、達磨さんが座禅をしています。そこに弟子入りしてくるのですが、これは、達磨が見向きもしてくれないので、自分の左手をちょん切っちゃうと。バサンとちょん切って差し出しちゃったというすごい話なのですが。

これが、その絵です。なんせ無視されているので情けない。ここには、ちゃんと血のりまで出ているのです。これを達磨に差し出して、よし、弟子にしてやろうということに、めでたくなるわけですからね。

これは、昨日も山下さんが言っていましたけれど、私も昔、これ不思議だったのですよ。これ、耳が裏返っているのです。こうなっているのですよね、これは、不思議なのですが。しかし、まあこれ、ともかく、この迫力は何とも言えないでしょう。こんなの、普通ないですよ。水墨画って普通は、先ほどもみたいに、ばあっと描くわけですから。どうやって描くかということ、特筆の、さらに、筆の先をちょん切っちゃって、平たくしたやつで、グウツというふうに描いている。

ちょっと斜めにしてみましたけれど、これは別に、あまり他意はありませんので。ちょっと遊んでみたのですけれど。何か、こここのところが、ぶつかりそうな感じですよ。これは値段が付けられないのです。やっぱり、この凸凹が、すごいでしょう。

ちょっと時間がなくなってきたので、作品をとばしましょう。

これも今、出ています。花鳥図屏風。これは首が折れますよね。何ていうか、このあくの強さ、これももう一つの特徴なのです。だから、こういうふうに、うわあっと奥へ奥へと重なっていく、このゴチャゴチャさ。そういうのは迫力を見てほしいのですね。だから、あんまりきれいという訳ではないのです。べた塗りでしょう、いわゆる。

これは観音菩薩です。これも非常に複雑な光景です。この組み方が、また何とも言えないのですが、ちょっと時間がなくなりましたので省略して、ここをちょっと見てく

ださいね。ここにあるのは何かというと、木なのです。小さな木で、この木の描き方は遠くの木の描き方。本当だったら、この辺にないといけない、この辺。それを一番手前に描いちゃったのですね。しかも、やっぱり、こちらへん、何かもうベトベトベトベト塗ったり、これは本当に、上の詩が描かれたのは雪舟が死んだあとですから。これは一番最後のところです。

こういうことをやる人ですね。だけれど、ここ、黒がないとさみしいではないですか。ずっと、この調子で塗っていたら、いいかげんと言えば、いいかげんですよ、これ。でもまあ、これがやっぱり工夫ですよ。だから、いいのですよ。

ですから、まともな絵の見方で褒めようと思わないでください。素直に見ていると変なところがいっぱいある。笑えるところもいっぱいあります。でも、そう思っていると、そういう墨の面だと思ってしまえば、墨の形だったり、何だったり。「ああ、こいつ、ここ、こうしようとしたな、黒いのが欲しかったな」あるいは、「何か力が抜けたな」とか、「ああ、いいかげんやっているな」とか、そう思っていていたほうが楽しいです。

そして最後に申し上げたいのは、いろいろと今、物語、物語と言ってきました。これは雪舟巻、益田ですね。清酒・雪舟です。雪舟グッズというのは、結構いろいろあります。私は、全部集めたのですが、全部は出せません。ついでに、雪舟ラーメン。これは総社ですよ。ただ、問題は、これは雪舟ラーメンでしょう。私は、喜び勇んで行ったわけですよ。さあ、雪舟ラーメンを食おうと。物語がないです。

つまり、雪舟ラーメンというのは屋号だけなのですね。別にお店の方にはいろいろご協力いただいたので非難する気はないのですが、結局、やっぱり物語が、まだ浅いんだと思うのですよ。このへん、やっぱり凝った「宝福寺ラーメン」とか、「雪舟、中国へ行ったぜラーメン」とか、あるいは「ネズミは描けなかったラーメン」とか、何か、そういう物語をもうちょっとまぶしてほしいという気がするのです。それによって、絶対、いろいろとつながっていきます。経済効果にもつながると思いますよ、絶対。だって、つい入っちゃうし、私なんか、つい食べ

ちゃいますものね。こういうのだって、つい買っちゃうわけですから。

私は、もう雪舟にいくらかけたか分かりません。こういうところで講演料などをいただいておりますけれども、絶対、大赤字なのです。ただ、雪舟ファンが増えたら、絶対もうかることですから。

そして最後にこれ、館から言われたので宣伝なのですが、これは特別につくってもらったそうなので、ミュージアムショップで売っているので、あとでいる方、これ、100グラムだか、200グラムで1,000円くらいなのでちょっとお高いのですが、買ってあげてください。

これはTシャツです。ぼく、山口、墨ちゃん。「ぼくちゃん」を墨にしたところが、雪舟墨ちゃんの水墨画なのですね。でも何か、ほら、イメージは、さっきのほうが近いでしょう。もうちょっと、いろいろつけてみたいですね。掛け軸も売っていますので。これは高いのですけれど。

とりあえず雪舟に乾杯ということで、極力、何て言うのかな、マニアでも楽しいんですよという話なのです。そしたら、いろんなことが楽しめるようになって、それを伝えていくと、どんどん広がっていく。ですから、まちおこしと言っても、すぐ建物だったり、グッズだったり、ものだったり、商品開発だったり、そういうものではなくて、じわじわ物語を広げていけば、しっかりとそれがあとにつながるのではないかなと、私は思います。

しかし、やっぱり、こういう。これは初めて見ました。話も終わったので、ゆっくりと飲ませていただこうと思います。ということで、つたないお話でしたが、私のお話はこれで終わります。

(終了)